

&quot;H&quot; and His  
kids

ハーメルンkpx

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

そのキャラが出てくるだけの、  
はつきり言ってほぼオリジナルです。注意。

参考時系列は

・悪魔これくしょん — デビこれ —

←

・当SS

です。

←	·	←
	D	S
	a	i
	d	n
	d	o
	y	f
	M	t
	u	h
	s	e
	t	S
	D	o
	i	u
	e	l
	/	
	D	
	i	
	r	
	t	
	y	
	M	
	i	
	k	
	u	
	C	
	r	
	y	

# 目次

Bullet	2	—	22
）			
M I S S I O N	0 2	）	不朽の魂
Bullet	1	—	1
）			
M I S S I O N	0 1	）	白赤の面影

MISSION 01  
Bullet 1  
白赤の面影

アメリカ、某所

??

「人づてではたしかこの辺りと……」

—Heelp!!

??

(!?)

「つ……」 タタタタッ!

路地裏

スケアクロウ

「ゲヒヤヒヤヒヤハッ！」

「ひっ！ ああっ……」

—グイッ

「ッ!？」

??

『ちやんと立って。速やかに避難してください』

「あ……ああっ！ アンタはッ!？」

??

『お構いなく。さあ早く』

「…ッ！ まさかあんたが最近噂になってるっ……!」

…ありがとよッ！助かったぜ！」 タタタタタッ！

??

(噂……?)

「何のことはわかりませんが……」

スケアクロウ

「ヒヤヒヤヒヤハア！」

??

「……先にこちらを片付けないといけませんね」

……

スケアクロウ

「ヒヤ……」ボロ……

??

「……Jackpot です」チャキッ

パン……

……

スケアクロウ

「

ブシュー…

??

(頻度が増している……)

「……今ここで考えていてもわからないわね……。

とにかく路地裏から抜けて、もう一度――」

―シユバツ

スケアクロウ

「ゲヒャア！」ブンツ！

??

「っ!？」

(伏兵っ……！)

「よいしょーっ」シユバツ

―ズバンツ

??

「……っ！」

????

「……よしつと。」

いやー、おねーさん、油断したねえ」 スチャ

??

(……!!)

くせ毛なのか、少しウエーブがかっている長い銀髪。そして、青い瞳の双眸。ドクロが特徴的な、かつての見慣れた長剣。そして、へそ丸出しの格好。

病的なまでに白く見える肌であるのに、

さらにその上、全体的に白基調のファッションをしている。

どこことなく懐かしい面影を感じさせる少女がそこにいた。

????

「銃の腕前はなかなかすごかったんだけどねえ。

考え事でもしてたかな？」

??

(……)

『あ、あの……助けていただき、ありがとうございます。』

……貴女は？」

???

「ん、あたし？」

あたしはビアンカ。

……んー、便利屋かな。それやってますっ。

あとアルバイトっ！」

??

「!!」

(ビアンカっ……)

ビアンカ

(……ん?)

「おねーさんは？」

??

『つ……あ、ああ……失礼しました。私の名前は——』

道中

ビアンカ

「ふわーすごいっ！」

日本からなんてまたずいぶんと遠くからだねえ」

??

「ええ……」

ビアンカ

「日本かあ。いろいろ聞いたことはあったけど、

さすがにまだ行ったことまではないなあ」

??

(……)

「……あの、突然なんですけど、ご家族は……？」

ビアンカ

「いるよー？」

パパとママと、あと双子の弟っ！ 名前はロツソって言うんだけどね。

あたしが言うのも何なんだけど、これがまたかわいいヤツでねー♪」ニヤハハ

???

「へえ……」

(……………)

事務所

?????#?????  
#

ビアンカ

「——つまり人探しってこと？」

???

「ええ、そうなりますね……」

ビアンカ

「ふーむ」

立ち話も何だということ、少女の案内でとある事務所まで通された女性。  
そこに、

—ガチャ

???

「ただい……あれ？お客さん？」

ビアンカ

「あ、ロツソ。 おかえりーっ」 ヒラヒラ

??

「あっ……」

ロツソ

「……コーヒーくらいお出ししなよ、ビアンカ……」

こちらは短い髪の少年だった。しかし同じく青い瞳に銀の髪。  
そして、姉とは真逆の落ち着いた格好。

その少年は全体的に深い赤色基調のファッションをしており、その姿は女が知っていた、いつかの男を強く彷彿とさせた。その少年は「彼」に非常によく似ていたのだ。それ故に、確信してしまった。

??

「……………」ズキ……

ビアンカ

「あ、忘れてたww。

あたしのも淹れてー」

ロツソ

「まったく……………」

??

「……………あ……………あの、私はお構いなく……………」

ロツソ

「ああいえ、くつろいでいてください。  
すみません、気が利かなくて」…スツ

ピアンカ

「えへへー」

??

「いえ、そんな……………っ!？」

(黒い布で覆われた、背中にある三日月型のあれは……………!)

??

「……ですから、その……」

ピアンカ

(……………これは……)

「……………うーん、えつとね？」

??

「は、はい」

ビアンカ

「おねーさんさ、結局何しに来たのかなって」

??

「……え……？」

ロツソ

「……」

ビアンカ

「話を聞いてる限り、おねーさんの言う探してる人って

もう間違いないうちのパパのことだと思っただけども、

それで会ってどうするのかなーって」

??

「つ………そ、それは……」

ビアンカ

「お礼？ それ言ったら帰るの？」

わざわざそれだけのために遠路はるばるここまで来てくれたんだとすると、

それは娘のあたしからしてもほんとにうれしいなあーって」

??

「……」

ロツソ

「……ビアンカ」

ビアンカ

「……んー、まあ便利屋やつてる身としてはさ、

もちろん、お手伝いしてあげたいわけだけど、

本人さんの目的がはつきりしないようじゃねえ」

??

「あ……」

ロツソ

「……」

ビアンカ

「……なんてね。」

ま、黙って依頼をこなすっていうのも仕事ではあるわけなんだけどさ。

おねーさんの依頼の場合、そう言うわけにも行かないんだよね」

ロツソ

(……)

??

「え……?」

ビアンカ

「うちのパパ、わけあって今は名前も変えてるからね。

……んー、おねーさん、悪魔のこと知ってるみたいだから、

もうある程度教えてあげちゃうけどさ」

??

「……」

ビアンカ

「例えばさ、今日さつきあった出来事みたいに、

誰かが悪魔に襲われてたとするでしょ?」

あの頭の悪い悪魔程度じゃ、まあ無理なんだけど、

言葉が理解できるくらい悪魔だったとしたらね、うちのパパの名前を出すの。

…あ、本名の方ね」

ビアンカ

「それでまあだいたい中ボス？　くらいの悪魔なら、

その名前を盾にするだけでわりと簡単に退けられちゃうんだよね」

??

「……」

ビアンカ

「……でも、いつだったかそれが続いて、

ある時もつと強い悪魔を呼び寄せちゃったことがあつてさ……。

強力な悪魔だとパパと戦いたいってヤツ、まだいるにはいるみたいなんだよね……」

??

「……」

ビアンカ

「それで周りを巻き込みかけたことがあつたから、

もう本当に、かなり前から本名の方は隠しちやつてるんだよね。

そういうこともあつてさ、あんまりこう、表立って

パパが動くことつて少なくなっちゃって、

今はもうほんと、影でお仕事してるんだよね。

相手にしてるのはヘビーなのばかりみたいだけど」

ロツソ

(……)

ビアンカ

「……な　で、残念だけど、

おねーさんにもそう簡単には会わせてあげられないです……。

おねーさんの身が危なくなっちゃう可能性があるからね」

??

「……そんな……」

ビアンカ

「便利屋の仕事を含めて、”そっち”系でも簡単なお仕事なら、あたしとロツソが。

あたし達の手に負えないようなのはパパが、つて形態を今は取ってるの。

……だから、おねーさんの依頼もさ、あたし達が受けるつてことにして、

あたし達からパパにちゃんと伝えておく、つてことでどうかな？」

??

「え、ちよつと待ってくだ」

ビアンカ

「あ、もちろんお代はタダだよ？」

だつてお礼言いに来てくれただけでもんね☆」アハハ

??

「……私は彼に会うためにここまで来ました。

彼に会えるまで、ここを動くつもりはありませんっ……！」ギユツ…

ビアンカ

(……)

ロツソ

(……ええ……)

ビアンカ

「……プッフｗｗｗｗ

おねーさん、面白いねｗｗ」

??

「……え？」

ロツソ

「……」

ビアンカ

「や、だつてさwwww」

ふふっ……ごめん、なんか案外、子供みたいなんなんだなって」

ロツソ

（まあたしかに見た目だけなら、明らかに年上だけど……）

??

「っ／／／

な、何とでも言つてくださいっ！ それでも私はっ……っ！」

ビアンカ

「すっごく美人なおねーさんなのにwww」プススー

??

（っ!?!）

「な、何とでもっ！／／／／

ビアンカ

「あははっ！ おもしろーっ」ニヤハハッ

ロツソ

「……ハア」

.....

??

「……」ギユ……

ロツソ

「……」

ビアンカ

(……ふーむ)

「ちなみに言つとくと、パパはほんとしばらく帰つてこないよ。

今はたまによくある出張中だから。1〜2ヶ月とか言つてたかも？」

??

「……待ちます」

ビアンカ

(……これはもうアレかねえ)

「……んふふ、わかったよ。」

それじゃ、おねーさん、ここでしばらくあたし達のお手伝いをしてくれないかな？  
お仕事の報酬はお安い手間賃みたいなこともしょっちゅうだから、  
お給料はあげられないと思うけど、  
衣食住なら提供してあげられると思うし。 どうですか？」

??

「……………え……………？ 置いていただけると言う事ですか？

……………いいのですか？」

ビアンカ

「おねーさんがいいならね。

その仕事っぷりでおねーさんがどれだけ強いのか、見せてもらおうかなーって。  
それで十分か、そうでないかも考えさせてもらおうかな？」

??

(！)

「……………はいっ、これからよろしくお願いします！」

ビアンカ

「はい、こちらこそよろしくお願ひします」ニハッ

ロツソ

「……ビアンカ」ボソ…

ビアンカ

「…まあ、しかたないじゃん？ あの人、多分ほんとに動かないよ」

ロツソ

(……)

ビアンカ

「…うーん？ ロツソくんにはまだ少し難しい感じかなあー？w」ニヤニヤ

ロツソ

「……huh」

MISSION 02 〈不朽の魂〉  
Bullet 2

教会

ロツソ

「……」

—ギイ… パタン…

??

〔ビアンカに頼まれて様子を見に来たけど…本当にいましたね…〕  
「……お祈りですか？ロツソくん」コツコツ

ロツソ

「……いえ、違います。ただ見ていただけですよ」

??

「……その像をですか？」 スツ…

ロツソ

「は、」

……

二人とも言葉は交わさず、同じ像を見やっていた。

その像というのは教会であればどこにでもある物で、

これといって特に物珍しい造形をしているというわけでもなかった。

??

「……」

（……この像はいわゆる——）

ロツソ

「その問いには答えぬ者——」

??

「え……?」

ロツソ

「何かを語りかける意味はなく、また何かを語ることもない者。

たとえ祈ったところで、それに応えてくれるわけでも、

助けてくれるわけでもない者。

……そもそも誰かを救えるような、そのような力など元より持ち合わせぬ者」

??

「……」

ロツソ

「祈る人間がいなければ、生まれることはなかったし、

その人間の絶え間ない信仰なくしては、その存在を保つことすら出来ない。

力は愚か、口すらない。

たとえ自己の存在を穢されていようとも、抵抗も、反論すらもできずに……

人に忘れられて、死んでいく……。

何と脆く、弱く、愚かで無意味な存在であることか……」

??

「……」

突然の少年の独白。

それに気を取られ、思わず少年の方を見る女性。

先の言葉を語った少年の目は変わらず像を見ていたが、

その目はなんとも言いがたい、無感情な目であるように女は感じた。

少年のその目の真意を、無感情な目からではなく、

他ならぬ、少年が目をやっている協会の像からならば少しでも探れるのではないかと

女は思い、再び静かに像を見やる。

??

(……)

ロツソ

「……でも、ある人がこういうことを言っていました。

”ソレ”は本来、己の中にこそあるものだ」と

??

「……」の中?」

先の口調とは明らかに温度が違う少年の発言が気になり、  
女は咄嗟に少年の言葉を、そのまま聞き返した。

ロツソ

「……フフ。」

人それぞれに、それはあるってことなんですかね。

……だとするなら、それはいいみたいという姿をしているのでしょうか？」  
??

「……」

女は今一度、像を見やった。

事務所

ピアンカ

「——お待ちどおさま！　ご注文のストロベリーサンデーですっ♪」

??

「おお、これはすごいですねっ……!!」

ビアンカ

「喫茶店でアルバイトしてるからねー。」

昔からある、パパの行きつけだった所なんだよ♪」

??

(……)

「へえ……」モグツ…

ビアンカ

「家でもそうなんだけど、もう料理とかもけっこう任せられちゃってるから、

材料さえあればたいいの物は作れちゃうかなー♪」

??

「おー」パチパチパチ

ビアンカ

「へっへーん」フンス

ビアンカ

「ーっておねーさん、付いてるよ？ w w」っJ

フキフキ

??

「んむっ!!? ……あ、ありがとうございますっ…／／／／」

ビアンカ

「いえいえ、どういたしまして」アハハ

ロツソ

「……」モグ…

ビアンカ

「ロツソもどう？ ってあんたも付いてるしー」っJ

ロツソ

「ん? …!?!? ちょ 自分でy」

ビアンカ

「こら、動かなーい」

フキフキ

ロツソ

「ッ…／／／／」

??

「……フフフツ……」

(本当にとても仲がいいんですね…)

……

ビアンカ

「——パパの話？」

??

「ええ……」

ビアンカ

(……)

「うーん、どこから話したものでやらって感じだけど」

??

「なんでも構いませんっ……!」

よろしければいろいろとお聞かせいただけたらな、と……」

ビアンカ

「ふむ……」

ロツソ

(……)

.....

ビアンカ

「——てな感じでまあ、うちのママ、パパにベタ惚れだからねえ。えーつと、知り合ってからだと何年になるんだっけ……？」

ロツソ

「……40年間だよ」

ビアンカ

「あーそうなるかあー。ながいよねえーw w

付き合いだけならトリツシユさんより長いんだとか」

??

「……」

ビアンカ

「出会ってすぐとか、昔はいろいろ揉めたみたいだけどね」

ロツソ

「借金とかね……」

ビアンカ

「それw w w

あとまあ、これはトリツシユさんから聞いたんだけど、

……ああ、ママはこの手の話、絶対に口割らないからさw w w

??

「……」

ビアンカ

「なんでも……んと、これはあたしたちが生まれる前の話なんだけど、

当時、パパが”魔界”に閉じ込められちゃったことがあってさ。

まあ本人は観光旅行だとか言ってたんだけど……w

そこからパパを脱出させる際に、

トリツシユさんとママで協力し合ったことがあったのね」

ロツソ

(……)

ビアンカ

「その甲斐あって、なんとかパパは魔界から帰ってこられたわけなんだけど、

……あー、まあトリツシユさんは元々なんだけど、ママがね……。

「パパは”魔界落ち”してからもう”すぐ”に、だったみたいだけど……」

ロツソ

(真の……)

??

「……?」

ビアンカ

「……んーと、もう言っちゃうと、

年を取らなくなっちゃったみたいなんだよね。

厳密に言うると老化が止まっちゃった、みたいなの？」

??

「っ!？」

ロツソ

「……」

・・・・・

ビアンカ

「それでなんかまあ、もうそれがほぼ決め手だったみたいだねえー。

トリツシュユさんが言うには、

今までの溜めに溜めといた借金の分も合わせて、畳み掛けてたつてさwwww

”責任取りなさいよっ!”　　ってw w」プフフーw w

??

「……………」

ロツソ

「……………」

ピアンカ

(……………)

「……………それで、気持ちを言っちゃって、結婚してからは

元々、心に溜め込んでた物が堰を切ったみたいになべタ惚れっていうか。

ま、そんな感じかな。　　ママの話もけっこうしちやったねw」

??

「……………いい、いえ……………」

ロツソ

(……………)

……………

ピアンカ

「はい、これが昔の写真」

つ 【四人家族＋トリツシユ】ピラッ

??

(……) ジー……

ビアンカ

「あたしら可愛いくない？」

あたしもロツソも5才のときにみんな撮った写真だよ。10年前のやつだね。

……あ、そだ。パパとママの見た目は今もその写真のときと変わってないよ」

??

「……」……

ビアンカ

「……んふふ、パパかっこいいでしょ？w」

??

「っ!!? / / / /」

ビアンカ

「あははww なんか昔、めちやくちや絞ったとかは言ってたよw

魔界落ちの前ね」

??

(……私の知らない、あの人の時間……)

ビアンカ

「……」

???

---

ロツソ

「……フツ！」

ヒュオオーツ!

ロツソ

「……」グツ……

―スツ……

トリツシユ

「……ハイ。 久しぶり、 ロツソ」

ロツソ

「っ！ ……ええ、 お久しぶりです、 トリツシユさん」

……

トリツシユ

「最近、 ” それ ” の調子はどう？」

ロツソ

「いい感じですよっ」

トリツシユ

(へえ……)

「大したものね。 もううまく扱えてる」

ロツソ

「っ……ありがとうございます！」

トリツシユ

「ふふっ……」

……

トリツシユ

「――それじゃ、慌しくてごめんなさいね。 用事があるから」

ロツソ

「はいっ、ではまた！」ビツ

トリツシユ

「ええ」ヒラヒラ

シュンツ…

トリツシユ

「……フフフツ……」

---

買い物的一幕

ビアンカ

「――だから、毎週の火曜日には、…って、あーっ」

??

「？」

ビアンカ

「ネロおじさんだ。こつち来てたんだあー。」

「おーい！」

ネロ

「……ん？」

そのころのネロおじさん（嘘）

{IMG20961}

---

教会

ロツソ

「……」

「——君は、よくこの時間に訪れるんですね」 スツ…

ロツソ

(……………?)

「……………貴方は？」

「おっと、これは失礼しました。

……………と言つても、名乗るほどの者ではありませんが……………。

呼ぶのに困るといふ意味でしたら……………グンカと、お呼びいただければ」

ロツソ

(……………見た目はアジア系、か。それが教会に、ね……………)

「……………ロツソです。

僕の方は貴方のことを知りませんが……………」

グンカ

「ああ。

私は二週間ほど前にこちらの方に引っ越してきましたね。

住み家の近くに教会があることを知ったのはつい最近のことなのですが……」

ロツソ

「……」

グンカ

「この街の教会はとても美しい……」

ロツソ

(……) huh…

グンカ

「惹かれてしまいましたってねえ。」

以来、足しげく通っているのですが、今日のようにご先客の方がおられる場合には

私のような新参者があまり前に出るのもどうかと思います、遠慮していたんですよ」

ロツソ

(……)

「……へえ。」

それで、今日はいったいどのようなご心境の変化で？」

グンカ

「……いつもは遠慮して、そのまま帰ってしまうのですが、

君のことはいつも気になっていました。とても娟容な少年がいる、とね。

私が君のことを知っているのはそういうことですよ」

ロツソ

「……」

グンカ

「……ん？」

……あ、ああ……いやいや、そういう意味ではありませんよ？

これはこれは。誤解を招く物言いをしてしまつて申し訳ありません。

実はまだ、英語にも不慣れなんですよ」ハハハ…

ロツソ

「……そういう意味でないなら、本当の理由は？」

グンカ

「先にも言ったように、私はこの街に来てまだまだ日が浅い。

友人もほとんどいなくてですね。それでずっと寂しい思いをしていたので、

今日は思い切つて勇気を出してみた、というわけです。

どうでしょう？ 私の家は本当にここからすぐ近くにあるので、少しお茶でも」

ロツソ

「……せっかくのお誘いですが、遠慮しておきます」

グンカ

「……そうですか、残念です……」。

では一つだけ、助けていただけたいといいますか、  
せめて教えていただいことがあるのですが……」

ロツソ

「……僕にわかることであれば」

グンカ

「ありがとうございます」。

この街の風土や歴史にお詳しい方を探しているんです。  
心当たりなどはありませんか？」

ロツソ

「……ふむ……」。

すぐには思いつかないですね……」。

図書館などのご利用は？ 中心街にあるはずですが」

グンカ

「そちらはもう当たりました。」

ただ、表面的なことばかりで求めていたようなことは何も……。

……今回私が望んでいるものは、どちらかと言えば俗物的な内容の物で、

であればやはり、それらを知る人からの口から真に入るような話が聞きたいのです。

要はオカルト、そういった類いの話なんですよ」ハハ

ロツソ

「オカルトですか……。」

具体的にはどのような？」

グンカ

「……この街ではあまりにも有名な偉人として伝わっている、伝説の魔剣士のお話です」

ロツソ

(!!)

「……へえ。 ずいぶんと変わった趣味をお持ちなんですネ」

グンカ

「いやはや、お恥ずかしながら」ハツハツハ

ロツソ

(……)

グンカ

「こう見えても、実は民俗学を始めとして、そういった物の類いも真面目に研究している者でしてねえ。」

あ、オカルトに関しては趣味を多分に含みますけどね」フッフ

ロツソ

(……)

「それで、”この街のオカルト”についても、

その趣味からの興味と研究心に駆られて異国からわざわざ、というわけですか？」

グンカ

「その通りです。」

と言つても、私自身はかの伝説の魔剣士に関しては、

まったくの無縁の存在であるというようには感じていません」

ロツソ

「……」

グンカ

「実は、私は日本人で、

普段であれば、日本各地の風土や歴史を研究しているわけなのですが」

ロツソ

(日本人か)

グンカ

「今回こうして、アメリカのこの地に赴き、かの魔剣士伝説を追い求めてきたのはこの伝説とその中心人物とが、日本の神話や過去に日本で崇められていた神や偉人と非常に似通った類似性を持っていると感じたからなんですよ」

ロツソ

「……日本の神話に、神……？」

グンカ

「ええ。」

……まあそうは言っても、そもそも世界中の神話やオカルト、怪談話などで

似たような話があるなどということとは元々そんなに珍しい事でもありませんがね。

本音を言ってしまうえば、最早ただの完全な興味ですなあ」ハハハ

ロツソ

(……日本か。

日本の神々……正直なところ、それらに対し、単純に興味がないわけでもないが……。

それよりも……)

グンカ

「……」

ロツソ

「……………」

（……かの魔剣士について、何か具体的なことを知っている者は本当に少ない。

父さんですら、特にこれといって何かを知ってるわけでもなかった。

当然、日本と関わりがあつたのかどうかも、誰も知らない……。

でもかつて20年前、父さんとはある仕事で日本に居たというのは聞いたことがある）

グンカ

「……おや、ロツソ君？　どうかしましたか？」

ロツソ

「つ……………あの」

グンカ

「はい？」

ロツソ

「先の話ですが……………そのオカルト話であれば、多少は力になれるかもしれません」

グンカ

「……………おお」

とある一軒家地下

ロツソ

「……………——ッ」

(……………なんだこれは……………磔か……………?)

グンカ

「おはよう。気分はどうかな？」

ロツソ

「……………当然、良くはないな。

まずこの、教会にあつた像と同じ格好なのが気に入らない。

センスを疑う」

グンカ

「む？ ……ああ、そうだったのか。

いつも見上げていたものだから憧れているのかと思って  
気を利かせたつもりだったんだが……。

……そうか、”そっち”か。

なるほど、やはり悪魔だから”そう”思ってしまうのかな？」

ロツソ

「………目的は？」

グンカ

「変わりないよ。 上で言った通りだ。

少し手段が強引かもしれないというだけで」ガゴツ

ロツソ

「………よくもまあ、見事に握れているものだな」

グンカ

「苦労はしたよ？」

何もそう易々と出来ているわけではない。

ただでさえ、バカデカい剣なんだ。むしろ、私からすれば君のような細身の少年が  
普段は布に隠しながら背中に担ぎ、有事となれば並々と振るうという事実の方が  
感嘆に値するよ」

ロツソ

「H u h . . .」

グンカ

「……やはり、羨望してやまない。そんな素晴らしい力だね、”それ”は」

ロツソ

(この男、どこまで知っている……)

「……何者なんだ？あんな」

グンカ

「……人間さ。見ての通りね。

君達、悪魔からすれば取るに足らぬ矮小な存在。

それと同じだよ。

……今はまだ、ね……」

ロツソ

「……」

グンカ

「……さあ、では見せてくれ。

そして、学ばせてほしい。

君の悪魔の力を——」

——ズブンツ!!

ロツソ

「ツ!?! がッ……あ……!」 ガフツ!

グンカ

「——悪魔の真の力を」

男の握る三日月型の赤い大剣が少年の胸部を貫通し、背後の碟に突き刺さる。

??????

ロツソ

「……力も無き存在を崇拜することに意味など……！  
己が強くなること……それこそが……！」ビリ……

??

「っ……！」

(目に見えている、あの赤い光は……！)

ビアンカ

「ロツソ!!」 タタタツ！

??

(!!)

ビリイツ!!

—ドシヤツ!

ビアンカ

「んぐうっ!!」

??

「ビアンカっ!」 タタツ…

ビアンカ

「下がってて!」 ハアハアツ…

??

「っ…」

ロツソ?

《……》…ビリツ…

ビアンカ

「あたしが行かないとダメだからっ……！」 ググツッ……

??

「……しかしっ！ ロッソくんの今のあの姿は……！」

ビアンカ

「わかってるっ……大丈夫……！」

??

(ビアンカ……)

……

……

・

??

「——ビアンカっ!!」タタタッ!

ロツソ

「ツ……ハアハアハアツ……」

(……像が……僕は……? ——ツ!!)

ロツソ

「ビアンカ!」ザッ!

??

「無事ですか!」

——グイッ

ビアンカ

「いっ!? ちよっ……ちよつといたい……」アハハ…

??

「あつ、ごめんなさいっ。……ふう、よかったです。

本当に……」

ロツソ

「……………ビアンカ、僕は……………その……………」

ビアンカ

「……………ふふ、そんな顔しない」

ロツソ

「つ……………」

ビアンカ

「……………あんたはあたしの弟で、あたしはあんたのお姉ちゃんなんだから」

ロツソ

「ビアンカ……………」

??

「……………」

(……………どこであっても、いつであっても、どんなときでも、”それ”は変わらない……………)

—ゴゴゴゴオオオオツ……………!!

「!?」

??

ゴゴゴゴオ……ツ

ビアンカ

「うあー、大きいなあー。」

……あれ、パパじゃないと無理じゃない？」

ロツソ

「……いや見た目だけだよ。」

力の本体は中枢。それさえ叩ければ……」

??

「……急ぎましょう、民間に被害が及ぶ前に……！」

中  
枢  
|  
?????  
|

?????

「…………ふざけるなッ…………!! 何が違う!? なぜ貴様らのようなガキ共にイツ!!」

ビアンカ

「…………心無い悪魔なんかとは違う——」

ロツソ

「…………ましてや、力無き神などとも決して違う——」

??

「…………何よりも、”人”であるということ。

私達はそのことに誇りと信念を持っています。

そして、それぞれが、その心に強い信条を…………」

ビアンカ

「…………」

ロツソ

(……)

?????

「……信条、だと……？」

??

「そうです。

それが理解できないあなたに……私達が負けるはずがありません……！」

?????

「ツ……ほざくなアアー!! こんなところで終わってたまるかッ!

何年かかったと思っっている……!?! 20年だぞっ!?

やつとのことで手掛かりを掴んで海を渡った!

そしてこの地でさらに時間を費やし、ついにこの肉体と力を手に入れたんだぞッ!!」

ゴオオオオオ——!!

ビアンカ

「……悪いけど、ご苦労様としか言えないよ」

ロツソ

「……」

??

「……お二人とも、よろしいですか？」

ビアンカ

「もちろん♪」

はい、ロツソっ」ヒュンツ

ロツソ

「僕には不要なんだけど……」。

まあ、今回は二人に合わせるよ」パシッ ―チャキン

??

「合図しますっ！

お二人、わかりますか？」

ビアンカ・ロツソ

「S u r e」

—ガチャンツ!!

「—Jackpot!」